

寺田寅彦全集

第十二卷

寺田寅彦全集 第12巻 (全17巻)

1961年9月7日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第7刷発行

¥ 800

著 者 寺 田 寅 彦
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

俳諧・俳諧論

目次

俳諧	五
俳句	七
連句	二三
歌仙	二四
その他の連句	八六
紀行	一〇九
俳諧論	一二三
伊吹山の句について	一一五
夏目先生の俳句と漢詩	一一八

連句雑俎・	一二〇
天文と俳句・	一七六
俳諧の本質的概論・	一八六
俳諧瑣談・	二〇八
俳句の型式とその進化・	二二〇
俳句の精神・	二二五
注 解・	二四一
後 記・	二五五

俳

諧

俳
句

明治三十一年

鳴子引日に五匁の麻をうむ (ホトトギス月)

鬼灯やどの子にやろと吹き鳴らす (十月十日)

繕はぬ垣の穴より初嵐 (同前)

何虫ぞ今宵も簀戸に来て鳴くは (同前)

薬煮る鍋の下よりきりくす (十月十一日)

矢は尾花丸は桔梗となりけらし (同前)

霧晴れて兀として近し秋の山 (十月二十五日)

枯野行けば道連は影法師かな (十一月)

姉病むと柳散るころ便あり (同前)

地藏堂に子守来る日の落葉かな (同前)

明治三十二年

搦手の岩山つつじ盛りなり (三)

桜散る堂の裏手は墓場なり (ホトトギス月)

菜の花や東へ下る白拍子 (五)

傾城の瘡瘡うゑる日永かな (同前)

春風や遊女屋並ぶ向ふ河岸 (同前)

船を繋ぐ妓楼の裏や蘆の角 (同前)

革る妻が病や別霜 (同前)

韓客の詩を題し去る牡丹かな (六)

伴天連の墓をめぐりて野茨かな (ホトトギス月)

柴垣しばがきに煙草たばこ千しけり鶏頭花（十月五日）

寺小屋の門を這は入れば鶏頭花（同前）

大なる栗くり一つ飛んで失うせにけり（十月三日）

虫売むしうりや火の用心の蓑たばこ入（十月三日）

客僧の言葉少すくなき夜寒かな（十月五日）

荻刻あしむ音や戸を漏る夜寒の灯（同前）

山賊の煙草くゆらす夜長かな（十月五日）

草枯れの道郷みちに入る道祖神（十月二日）

乾から鮭さけに弓矢の神を祭りけり（同前）

仏舍利を祭る卓つくや水仙花（同前）

仏（冬季結）

仏壇の障子煤すすけて水仙花（十月二日）

明治三十三年

薬屋根やくやねに鶏鳴とりく柿かきの落葉おちばかな（一月三日）

頭巾づきん着てわりごくひ居る木樵きせうかな（二月七日）

枯かれ蘆あしやはたくと立つ何の鳥（三月）

木兎みうの赤い頭巾をかぶりたる（同前）

煙草屋の娘うつくしき柳かな（四月）

玄上げんじやうは失せて牧場の朧おぼろ月（同前）

日当りや手桶てびくの蜺舌しじなを吐く（五月三日）

橋番の娘なりけり蜺壳しじな（同前）

泉庁と市役所と並ぶ柳かな（五月五日）

明治三十四年

雨の家鴨柳の下につどひけり（同前）

暮六つや番所の柳風が吹く（五月三日本）

窓に垂るる柳や河岸の活版所（同前）

背戸川に泥船繋ぐ柳かな（同前）

椎の実や卵塔並ぶ苔の上（七月七日本）

初汐の燈心草を浸しけり（七月三日本）

鶏頭や小使部屋の狭き庭（七月三日本）

普請場や竹の矢来に桐一葉（同前）

口笛を吹くや脣そぞろ寒（七月三日本）

不忍池 一句

池の鴨森の鴉や夕時雨（七月七日本）

人間の海鼠となりて冬籠る（七月三日本）

明治三十四年

墓守の娘に逢ひぬ冬木立（七月三日本）

しばし待て今足袋をはくところなり（七月三日本）

刺史淵に鱷魚を祭る霰かな（七月五日本）

何もなき壁や霜夜の影法師（八月八日本）

藪蔭の浮草赤き冬田かな（七月六日本）

総領の甚六と申す鳴子引（七月六日本）

夕風の草に寐に来る蜻蛉かな（七月九日本）

縁に干す蝙蝠傘や赤蜻蛉（同前）

あらぬ方へ迷ひ入りけり墓参（七月三日本）

野良犬がついて来るなり墓参（同前）

石門や蔦紅葉してぶら下る（七月四日本）

唐黍や庄屋が蔵の白い壁(十月三日本)

朝寒の池に浮べる驚鳥かな(十月八日本)

杉垣に眼白飼ふ家を覗きけり(十月十三日本)

鳴飛んで路夕陽の村に入る(十月十三日本)

朝霜や木部屋の裏のくされ繩(十月十三日本)

蓼の穂の風や鶉の夜明顔(十月十九日本)

沙魚釣や同じ処に小半日(日本付録)

蕨ひえて蚯蚓鳴き出す別れかな(同前)

蕪大根時差の羹を具へけり(同前)

波 四句

荒波の何に驚く月夜かな(同前)

野分やんで波を見に出る浜辺哉(同前)

朝寒う波打際をあるきけり(同前)

行秋の波にただよふ卒堵婆かな(同前)

鉞毒 二句

出代や鉞毒を説く国訛り(同前)

蠶螂の乱を好むにしもあらず(同前)

山 三句

夜興引やそびらに重き山刀(同前)

禿山を師走の町へ下りけり(同前)

築山を巽に築き小六月(同前)

髪 四句

髪洗ふ風呂場の口や秋西日(同前)

秋風や眼を病む妻が洗髪(同前)

雍髪して入道と号し芋頭(同前)

後朝や髪撫で上ぐる笹の露(同前)

明治三十五年

篝^{かがり}焚^たく* 函^{かん}谷^{こく}関^{くわん}の霜^{しも}夜^よかな
埋^{うづみ}火^ひや煙^{けむり}管^{くだ}を^を探^{たづ}る枕^{まくら}もと*

(一月三日 本)
(二月廿日 本)

在^あ英^{えい}の^の人^{ひと}に^に寄^よす 一^{いっ}句^く

唐^{たう}辛^{しん}子^し糸^{いと}瓜^かの^の国^{くに}を^を忘^{わす}る^るな*
大^{おほ}石^{いし}の^の浪^{なみ}宅^{たく}跡^{あと}や^や百^{ひゃく}舌^{した}鳥^{とり}の^の声^{こゑ}

(十月三日 本)
(十月廿六日 本)

明治三十六年

京^{きやう}は^は今^{いま}愚^ぐ庵^{あん}の^の柚^ゆ味^み噌^そ蕃^{たう}椒^{がし}
五^ご月^{げつ}雨^うや^や根^ねを^を洗^{せん}は^はる^る屋^や根^ねの^の草^{くさ}

(二月四日 本)
(ホトトギス月)

五^ご月^{げつ}雨^うの^の町^{まち}掘^ほり^りか^かへ^へす工^{こう}事^じか^かな 同^{どう} 前^{ぜん}

足^{あし}の^の出^でる^る夜^よ着^ぎの^の裾^{すそ}よ^より^り初^{はつ}嵐^{あらし}*
道^{みち}端^{はた}や^や草^{くさ}の^の花^{はな}と^とも^も実^みと^とも^も知^しれ^れず

(九月三日 本)
(十月廿九日 本)

明治三十七年

臙おぼろ夜よや垣かき根ねは白はき牡か蠣きの殼から
 柳柳の下のに物ものありと思おぼろふ臙おぼろ月つき
 そぞろ寒と鷄とりの骨ほね打うつ台たい所ところ
(日 四月 十六日 本) (日 同 前) (日 十一月 二十日 本)

明治三十九年

薏ぎ苡だの实みも何なにとかかにきくさうな
 曼まん珠じゆ沙しゃ華け二に三さん本ほん馬ば頭とう観くわん世せ音おん
(日 十一月 十五日 本) (日 十一月 十五日 本)

明治四十年

御降^{おまがり}や寂然^{せきぜん}として神の鶴^{つる}
(一月一日)
(国民新聞)

御降^{おまがり}や月^{つき}代^{しろ}寒^さき朝^{あさ}詣^{まうで}
御降^{おまがり}に尻^{しり}ぞ濡^ぬれ行く草履^{ぞうり}取^{とり}
(一月一日)
(ホトトギス)

(同前)

明治四十一年

歳^{とし}饒^{にぎ}ゑて庄屋^{しやうや}が門^{かど}の菊^{きく}悲^{かな}し
店^{みせ}先の菊^{きく}美^みしやあづま船^{ふね}
(十月三日)
(国民新聞)

(同前)